

金日成・金正日主義の創始と深化発展

チュチェ思想国際研究所理事
朝鮮大学校学長
韓東成

朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法第3条には、「朝鮮民主主義人民共和国は、偉大な金日成・金正日主義を国家の建設と活動の唯一の指導的指針とする。」と規定されています。

金日成・金正日主義は、金日成主席が創始し金正日総書記が体系化したチュチェの思想、理論、方法の全一的な体系であり、今日、金正恩総書記がたえまなく進化発展させている朝鮮の指導思想です。

社会主義における領袖の業績で最も重要な位置を占めるのは、その思想理論的業績であり、金日成・金正日主義は、金日成主席、金正日総書記、金正恩総書記の革命活動史の集大成であるといえます。

3月31日、金正日総書記の「チュチェ思想について」発表40周年を迎えましたが、著作には、チュチェ思想は金日成主席の深奥かつ多面的な思想理論活動の結実であり、チュチェ思想の創始はその革命業績の中で最も輝かしい地位を占めるとされています。

2月、朝鮮では金正日総書記の生誕80周年を記念し、その業績にたいする中央研究討論会が開かれましたが、総書記の第一の業績として金日成主席の革命思想を金日成主義と定式化し、時代と革命発展の要請に応じて発展させたことが挙げられました。

また1月に開かれた金正恩総書記の業績にたいする中央研究討論会でも、その第一の業績として、金日成・金正日主義を定式化し、朝鮮式社会主義完成のための思想理論活動を展開したことが強調されました。

金日成主席の生誕110周年を慶祝するこのセミナーの意義を踏まえ、金日成主席によるチュチェ思想の創始、金正日総書記による金日成主義の体系化、そして金正恩総書記による金日成・金正日主義の深化発展についてお話ししたいと思います。

1. 金日成主席によるチュチェ思想の創始

「わたしは、闘争の日々に芽生え、獄中ではぐくんだその思想と立場を、『朝鮮革命の進路』と題して発表したにすぎない。それが朝鮮革命の路線となり、指導思想となったのである。

わたしが論文で展開した内容は、チュチェ思想が核になっているといえる。この思想はその後、抗日革命闘争をはじめ、各段階の革命における複雑多難な実地の闘争のなかでたえず発展し、豊かになり、こんにちのように思想、理論、方法の全一的な体系をととのえた一つの哲学思想となったのである。

解放後、われわれが主体性の確立をとくに強調したのは、戦後の社会主義基礎建設の時期であった。1955年、わたしは、党宣伝扇動部門の活動家を前にして事大主義、教条主義を克服し、主体性を確立する問題について演説したが、それは『思想活動において教条主義と形式主

義を一掃し、主体性を確立するために』という表題の文献で公開された。

わたしはその後、折にふれて主体性を確立することについて強調してきた。チュチェ思想の本質と創始の経緯、その思想の具現については、外国人との談話のさいにたびたび説明した。

しかし、わたしはそれを体系化して本にまとめようとは思わなかった。ただ、朝鮮人民がその思想を正しいものとして受けとめ、革命実践に具現すればそれでよいと思ったのである。その後、金正日書記がその思想を全面的に体系化し、『チュチェ思想について』という論文を発表した。」(金日成『回顧録・世紀とともに』、第2巻、第4章、3.カ倫会議)

—チュチェ思想の出発点

チュチェ思想は、20世紀、朝鮮革命の新しい進路を開拓する過程で、金日成主席によって創始されました。

20世紀のはじめ、搾取と抑圧に反対する労働者階級と人民大衆の闘争において新たな転換が生まれていました。ロシア革命に勝利した社会主義の影響力が強まり、労働者階級の革命闘争と植民地および半植民地における解放闘争が高揚していました。帝国主義は人民大衆の革命的進出を阻み、深刻な政治経済的危機を免れようと、人民にたいする略奪と弾圧をさらに強化しました。各地で革命と反革命間の矛盾と対立が激化し、長いあいだ自主権を蹂躪されてきた人民大衆が階級的小および民族的解放をめざす闘争に立ち上がりました。革命運動が世界的規模で幅広く、多様性をおびて発展する新しい時代が到来していたのです。

新しい歴史的条件のもとで革命を前進させるためには、各国の労働者階級と人民が主人としての自覚をもち、すべての問題をそれぞれの実情に即して解決していかなければなりません。朝鮮では歴史発展の特殊性、革命の複雑さと多難さから、この問題がとくに重要に提起されました。

朝鮮における歴史発展の特殊性とは、封建時代にうまれた事大主義が長いあいだ国の自主的發展を阻害してきたということと、資本主義へと正常に移行することができず植民地半封建社会にあったということです。革命の複雑さとは、反帝民族解放革命と反封建民主主義革命の課題をともに遂行しなければならなかったということです。また、革命の多難さとは、日本帝国主義を相手として前人未到の道を独力で開拓しなければならなかったということです。

チュチェ思想、朝鮮革命のこうした実践的要求にもとづいて創始されたのです。

金日成主席自身が、生前、回顧録「世紀とともに」第2巻で、チュチェ思想が抗日革命闘争期に創始され、その後の各段階の革命における複雑多難な実地の闘争の中でたえず深化發展し、今日のような体系をもった一つの哲学思想になった過程を回想しています。

その内容を概略すると、①主席は1930年に中国東北地方のカ倫(カリユン)で「朝鮮革命の進路」と題する演説をおこなったが、その内容はチュチェ思想を核としていた。②解放後、主体性の確立を特に強調したのは、社会主義基礎建設期の1955年に行った演説から

であった。③チュチェ思想の本質と創始の経緯、その具現については、その後、外国人との談話のさいにたびたび説明した。④しかし主席自身はそれを体系化しようとは思わず、人民が正しいものとして受けとめ革命実践に具現すればよいと思っていた。⑤この思想の全面的な体系化は、金正日総書記によって実現された、ということです。

主席の回想にあるように、チュチェ思想の出発点は、抗日革命闘争期にさかのぼります。

この時期、主席は、当時の共産主義運動と民族解放運動のなかにはびこっていた、大衆から遊離してヘゲモニー争いと空理空論に明け暮れる傾向を批判し、革命の主人は人民大衆であり、人民大衆の中に入ってかれらを組織動員してこそ革命は勝利することができる、と主張しました。また主席は、外部勢力に頼りながら既成の理論と他国の経験を機械的に模倣しようとする事大主義、教条主義を批判し、朝鮮革命におけるすべての問題は、朝鮮人民自身の力で、朝鮮の実情に応じて、自主的に解決すべきだと主張しました。

この2点は、チュチェ思想の出発点、すなわちチュチェ思想の基本理念であり、それが明らかにされたことは、チュチェ思想の創始を示す歴史的な宣言であるといえます。

一 主体的社会主義の進路を開拓するなかで

解放後、革命と建設における主体性の確立が強調されたのは、1955年12月の「思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために」という演説からです。

この演説で主席は、戦後、社会主義建設を本格的にすすめるにうえて生じていた、朝鮮の歴史的経験と具体的現実を無視しソ連式や中国式をそのまま適用しようとする弊害を、思想活動における具体的な実例をあげながら厳しく批判しています。そして、思想活動は、自らをより正しく認識し、革命の主人としての自覚を高めることに貢献すべきであり、その意味で朝鮮革命こそが思想活動の主体であると強調しました。

演説は、事大主義と教条主義を克服し、主体を確立するための闘争における歴史的な転換点となりました。

その後、1964年4月のインドネシア「アリアルハム社会科学院」での講演で、主体性の確立におけるこの間の経験が総括され、自主的立場と創造的立場、思想における主体、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則が理論的に定義されます。そして、中ソ論争の真っただなかであった1967年12月に、共和国政府政綱において、チュチェ思想が革命と建設の指導指針、共和国政府の政策と活動の指針として規定されることになります。

それまで公にされることがなかった、チュチェ思想の基礎にある主席自身の哲学的理念については、1970年代に入って、自主の道をゆく社会主義朝鮮にたいする国際的関心が高まるなか朝鮮を訪れた諸外国の代表団との会見の席で、その質問に答えるかたちで表明されました。ここで重要な意義を持つのが、1972年9月の毎日新聞記者の質問にたいする回答「わが党のチュチェ思想と共和国政府の対内外政策のいくつかの問題について」です。

この談話で主席は、チュチェ思想の本質は、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推進する力も人民大衆にあるという思想であり、その基礎には、人間があらゆるものの主人でありすべてを決定するという原理があることを明らかにしました。

主席はその全生涯、各段階の革命と政治、経済、文化、軍事、そして民族統一と外交など様々な分野の活動を指導する過程で、その豊富な経験と業績を一般化しチュチェの思想、理論、方法を全面的に提示しています。

一般的に、思想は一朝一夕に完成するものではなく、歴史的過程の中で形成され発展するものです。チュチェ思想は、苦難に満ちた朝鮮革命の陣頭に立ってその進路を切り開いてきた金日成主席によって、革命実践が提起する切実な問題を解決する過程で創始された思想なのです。

2. 金正日総書記による金日成主義の体系化

「わたしが、わが人民の土壤に種をまき育んできたチュチェ思想を、金正日同志が生い茂った林にし豊かな実りとして結実させたということが出来ます。」(金日成『社会主義偉業の継承発展のために』1992.3.13、1993.1.20、3.3)

「金日成主義は一言でいって、チュチェの思想、理論、および方法の体系です。いいかえれば、チュチェ思想とそれによって明らかにされた革命と建設に関する理論と方法の全一的な体系です。人類の思想史ではじめて発見された偉大なチュチェ思想を真髄とし、それに基づいた革命理論と指導方法が全一的に体系化されているところに、金日成主義が従来の労働者階級の革命理論と区別される特徴があります。」(金正日『全社会を金日成主義化するための党思想活動のいくつかの課題について』、1974.2.19)

—金日成主義の定式化

金日成主席は、その遺訓が集約されている談話「社会主義偉業の継承発展のために」のなかで、「わたしが、わが人民の土壤に種をまき育んできたチュチェ思想を、金正日同志が生い茂った林にし豊かな実りとして結実させたということが出来ます。」と述べています。

主席が述べているようにチュチェ思想を一つの哲学思想として体系化し深化発展させたのは金正日総書記です。

チュチェ思想を哲学的に体系化するための金正日総書記の活動は、金日成総合大学を卒業し、朝鮮労働党中央委員会での活動をはじめた、1960年代中盤にさかのぼります。

当時、朝鮮は、国際共産主義運動の総路線をめぐる中ソ論争が激化するなか、思想における主体、政治における自主、経済における自立、国防における自衛を掲げながら、独自の社会主義の道を進んでいました。このような状況のもとで党の理論宣伝活動にたいする指導をはじめることになった総書記は、マルクス主義にもとづいたソ連式や中国式の世界社会主義思想に比べた主席の思想の独創性と優位性を明らかにし、マルクス主義と区別されるチュチェ思想の体系を確立するための思想理論活動を本格的に進めることを決意しました。

総書記は、1966年から1969年までの3年間、マルクス、エンゲルス、レーニンの著作を全面的に研究分析し、マルクス主義の革命思想史を再評価するための理論作業を推進しました。当時、総書記は、この過程を総括しながら、主席の革命思想以外にはどのような思想も朝鮮の革命と建設を正しく導くことはできないと十分な根拠を持って確信することができると述べています。

その後、金日成主席の思想を体系化するための集中的な理論作業をへて、1974年2月の朝鮮労働党中央委員会第5期第8回総会において党中央委員会政治委員に選出され主席の唯一の後継者として推戴された直後の、朝鮮労働党第3回思想活動家大会での結語のなかで、金日成主義を、チュチェ思想を真髄とする思想、理論、方法の全一的な体系として定式化しました。

一 独創的な思想理論活動

マルクス主義は、ドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学、フランスの空想的社会主義学説の三つを源泉とし、それを批判的に継承して解明された唯物弁証法と唯物史観を内容とする哲学、剰余価値学説を基本とする経済学、階級闘争理論にもとづいた社会主義学説を三大構成部分としています。これは、社会主義を空想から科学へと転換することをテーマとした理論活動の帰結といえます。

社会主義を空想から科学に転換するということは、すなわち、資本主義滅亡の不可避性と社会主義への移行の必然性を論証することであり、この理論的課題を遂行するうえで、哲学における社会歴史観の確立と経済学の革新は不可欠の契機となったのです。

チュチェの思想、理論、方法の三つの体系は、人民大衆の自主性を実現するための思想において必要不可欠の構成であるといえます。

チュチェ思想は、人間を哲学的考察の中心にすえ、人間の運命開拓の道を明らかにすることを使命とする世界観です。チュチェの革命理論は、人民大衆の自主性実現における各段階、各分野の革命の理論、戦略と戦術です。そしてチュチェの指導方法は、人民大衆の主人としての地位と役割を高め、革命と建設へとけん引する指導体系、活動方法と作風です。人間中心の世界観と、それにもとづいた自主性実現のための戦略と戦術、人民大衆との活動の方法論が一つに体系化されてこそ、人民大衆の自主性を実現する革命実践の指導思想を確立することができるのです。

総書記はその後、1982年3月に主席の生誕70周年を記念する全国チュチェ思想討論会で発表した論文「チュチェ思想について」で、チュチェ思想を人間中心の哲学的原理、社会歴史原理、指導原則として体系化します。そして、1986年7月の「チュチェ思想教育で提起される若干の問題について」、1996年7月の「チュチェ哲学は独創的な革命哲学である」をはじめとする著作を通じて、チュチェ哲学を、人間中心の哲学的世界観と社会歴史観、革命観と人生観の体系として集大成し、その原理と内容を深化発展させました。

これらとともに、主体的党建設理論、思想論や一心団結に関する理論、社会主義強盛国家建設理論、先軍政治理論など、金正日総書記によって新たな境地が展開された独創的な思想理論活動と業績は、チュチェの思想、理論、方法をいっそう豊富なものにし、朝鮮社会主義建設の実践においてその正当性と生命力を示しました。

3. 金正恩総書記による金日成・金正日主義の深化発展

「今日わが党と朝鮮革命は、金日成・金正日主義を永遠なる指導思想として堅持していくことを求めています。金日成・金正日主義は、チュチェの思想、理論、方法の全一的な体系であり、チュチェ時代を代表する偉大な革命思想です。」(金正恩『偉大な金正日同志をわが党の永遠なる総書記として高く戴き、チュチェの革命偉業を立派になしとげよう』、2012.4.6)

「金日成・金正日主義は、本質において人民大衆第一主義であり、人民を天のように崇拜し、人民のために献身的に服務する人がまさに、真の金日成・金正日主義者です。」(金正恩『朝鮮労働党第4回細胞書記大会でおこなった演説』、2013.1.29)

一金日成・金正日主義の定式化

金正恩総書記は、金正日総書記が逝去した翌2012年4月、朝鮮労働党第一書記(当時)、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会第一委員長(当時)に選出されます。

党と国家の最高指導者に就任する直前である4月6日の金正恩総書記の談話「偉大な金正日同志をわが党の永遠なる総書記として高く戴き、チュチェの革命偉業をりっぱになしとげよう」において、金日成・金正日主義が朝鮮労働党の指導思想として宣布され、その根拠と経緯、金日成・金正日主義の定義が明らかにされます。

これまで金日成主義とされてきた指導思想を金日成・金正日主義とする根拠は、金正日総書記が、非凡な思想理論的英知と深い探求力をもって精力的な思想理論活動を展開し、①金日成主席の革命思想を金日成主義と定義した、②金日成主義を自主時代の指導思想として全面的に深化発展させた、③金日成主席の銃剣重視の思想を先軍革命思想、先軍政治理論として展開した、④社会主義強盛国家建設理論を示したことによって、金日成主義の牽引力と生命力を一段と高め革命実践でその正当性を実証したところにあるとします。

金日成・金正日主義を宣布するに至った経緯については、①金日成主義を時代と革命発展の要求に応じて発展させ豊富にした金正日総書記の業績により、久しいまえから党員と人民は主席と総書記の思想を結びつけて金日成・金正日主義と呼び、それを党の指導思想と認めてきた、②しかし金正日総書記は、金日成主義をいくら掘り下げても金日成主義以外のものではないとして、自らの名と結びつけることをきびしく制止した、③今日朝鮮労働党と朝鮮革命は、金日成・金正日主義を指導思想として堅持することを要求していると述べています。

金日成・金正日主義の定義については、金日成主義と同様に「チュチェの思想、理論、

方法の全一的な体系」とされます。ここで金日成・金正日主義とチュチェ思想の関係について一言付け加えるならば、チュチェ思想という範疇には、思想、理論、方法の体系としての広義のものと、この三大構成のなかで理論や方法と区別される思想としての狭義のもの二つがあり、思想、理論、方法の体系としての広義のチュチェ思想と金日成・金正日主義は同じ範疇です。

一金日成・金正日主義の本質は人民大衆第一主義

今日、金日成・金正日主義は、金正恩総書記によってたえまなく深化発展しています。ここで重要な位置を占めるのが、金日成・金正日主義の本質を人民大衆第一主義として解明したことです。

金日成・金正日主義の本質が人民大衆第一主義と規定されたのは、2013年1月の朝鮮労働党第4回細胞書記大会での金正恩総書記の演説においてです。

金正恩総書記は演説で、「金日成－金正日主義は、本質において人民大衆第一主義であり、人民を天のように崇拜し、人民のために献身的に服務する人がまさに、真の金日成－金正日主義者です。」と述べています。そして、主席と総書記を仰ぐように人民をいただき、人民のためにすべてをささげるのが党の確固たる決心であるとしながら、人民大衆第一主義を具現するスローガンとして「すべてを人民のために、すべてを人民大衆に依拠して！」を提示しました。

金日成主席の座右の銘は「以民為天」であり、金正日総書記のそれは「人民のために服務せん」でした。「以民為天」と「人民のために服務せん」に込められた主席と総書記の思想を継承した金正恩総書記が、それを人民大衆第一主義として指導思想の地位にまで高めたということが出来ます。

人民大衆第一主義は、人民大衆を革命と建設の主人とみなし、人民大衆に依拠して人民のために滅私奉仕する政治理念であり、朝鮮における社会主義基本政治方式となりました。それは、人民を世の中でもっとも貴重で力強い存在とするチュチェの革命哲学の具現であり、人民をかぎりなく大切にし人民の要求と利益をあくまで実現しようとする党と政府の徹底した立場の反映であるとされています。

このように人民大衆第一主義を前面にかかげる根拠は、二つあります。一つは、人民が社会主義国家の根幹かつ地盤であり、その発展の担当者であるということです。党と政権機関の活動が、人民の要求と利益の擁護実現、人民のための忠実な奉仕を志向してこそ、社会主義の生命力と優越性が発揮されます。

二つ目は、社会主義建設過程で専横や官僚主義のような人民の利益を侵害する現象が生じないようにするためです。人民のうえに君臨し人民があたえた権限を悪用する特権行為は、社会主義のイメージと人民的性格を曇らせ、党と国家にたいする人民の支持と信頼を弱め、社会主義制度の存在自体を危うくします。

金正恩総書記は、党と国家は人民に滅私奉仕し、人民は党と国家に自らの運命と未来を心から託すところに、人民大衆第一主義を具現した朝鮮の真の姿があるとしながら、社会主義建設が前進すればするほど、人民大衆第一主義を具現するための活動により大きな力を注いで、他が模倣することのできない朝鮮式社会主義の固有の優位性をより高く発揚することを訴えています。

人民大衆第一主義とともに、社会主義建設の全面的発展、わが国家第一主義、革命の内部的動力強化に関する理論をはじめとする総書記の独創的な思想理論は、金日成・金正日主義を一層深化発展させるとともに、社会主義建設の新たな高揚期、全面的発展期に入った朝鮮において、人民を自らの理想と念願の実現へと導く実践綱領、旗じるしとなっています。

『労働新聞』3月27日付社説は、「敬愛する総書記同志の革命思想は、朝鮮式社会主義の全面的発展のための不滅の大綱領であり、わが人民の生と闘争の教科書である。ここには、社会主義建設において重要な問題として掌握すべきか、達成する目標とその遂行方法はどこにあるのか、いかなる思想精神と闘争気風、仕事ぶりを身につけなければならないかが全面的に集大成されている。」としています。

* * *

金正恩総書記による金日成・金正日主義の宣布後、世界で初めてその名を冠した研究会を結成したのは皆さん、すなわち日本のチュチェ思想研究者による2014年2月の金日成・金正日主義研究全国連絡会でした。

皆さんのすばらしい活動に鼓舞されながら、今後とも朝鮮人民の指導思想であるチュチェ思想、金日成・金正日主義に対する研究を深め、その具現である在日朝鮮人の民族教育をしっかりと固守発展させる決意を新たにするとともに、日本をはじめとする世界のチュチェ思想研究活動のさらなる前進を祈念しています。

* 資料 「金日成・金正日主義」の構成

1. チュチェ思想

- ① チュチェ思想の哲学的原理
- ② チュチェ思想の社会歴史原理
- ③ チュチェ思想の指導的原則

2. チュチェの革命理論

- ① 革命の一般原理
- ② 民族解放、階級解放理論

- ③ 社会主義建設理論
- ④ 祖国統一理論
- ⑤ 世界の自主化理論

3. チュチェの指導方法

- ① 革命的指導の本質と原則
- ② 革命的指導体系
- ③ 革命的活動方法と人民的活動作風